

增補改訂

# 新潮日本文学辞典



新潮社

---

---

增補改訂

# 新潮日本文学辞典

編集

|       |      |
|-------|------|
| 磯田光一  | 楠本憲吉 |
| 上田三四二 | 瀬沼茂樹 |
| 大岡信   | 中村光夫 |
| 尾形 仂  | 福田秀一 |
| 尾崎秀樹  | 保昌正夫 |
| 小田切進  | 山本健吉 |

新潮社

---

---

増補改訂 新潮日本文学辞典

発行 一九八八年一月二〇日

五刷 一九九一年三月一五日

編集 新潮社辞典編集部

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

業務部(03)三二六六―五一―一

編集部(03)三二六六―五三九八

振替 東京四―八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

装画 ジョルジュ・ブランク

「ワケ射る」一九六〇年

© ADAGP Paris and  
BCF Tokyo 1987

価格は函に表示してあります。  
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

## 新版刊行にあたって

去る昭和四十一年に創立七十周年を迎えた新潮社は、その記念出版の一つとして『新潮日本文学小辞典』を四十三年一月に刊行し、姉妹編『新潮世界文学小辞典』とともに幸い読書界に好評を得ました。後掲の旧版序にみられる通り、古典から現代に至る日本文学のすべてを一冊に集約した辞典として、いまなおその種の唯一のものですが、以後二十年の時の経過は、現代文学に多大の変化をもたらし、また古典の研究にも少なからぬ進展をもたらしました。これらの変化、進展に対応すべく全面的な改訂を行なった『増補改訂新潮日本文学辞典』をここに刊行いたします。

新版の編集にあたっては、旧版編集委員の瀬沼茂樹、中村光夫、山本健吉の三氏、同専門委員の尾形仿、尾崎秀樹、小田切進、楠本憲吉、福田秀一の五氏に、新たに磯田光一、上田三四二、大岡信、保昌正夫の四氏の参加を得て、全巻にわたる検討の上、改訂及び増補の方針を決定、さらに原稿の校合、調整の過程で専門協力を後掲の諸氏にお願ひし、ここに完成をみました。

旧版の二一〇一項目（改訂にあたり二二〇〇に統合）に新項目五二七を加え、人名や雑誌名のみならず、事項にも「アイヌ文学」「沖縄文学」「検閲」「ノンフィクション」その他「現代の……」といった新項目を立てたことと、旧版既存項目の全面的な改稿、あるいは記事の追加によって、今日の文学情況に即応し得たものと信じます。古典項目のテキスト記載、人名項目の全集記載も、編集委

員の指示のもとに最新のデータを配し、雑誌項目については専門家の最新の知見によって訂正された本文記事のほか、新たに復刻版を付記して研究の便を図りました。

付録においては、日本文学年表、文学賞受賞者一覧で一部入れ替えと増補を行なったほか、新たに全国主要文学館案内と文学行事ごよみを最新の調査に基づいて加え、参考文献一覧は膨大な量に達したので割愛しました。

このような現代にふさわしい項目と内容記述、また、徹底調査により正確を期したデータが読者の信頼にこたえ、旧版の長所を保ちつつ一新した『増補改訂新潮日本文学辞典』として、永くご愛用いただけるものと信じます。

昭和六十三年一月

新 潮 社

## 序〔旧版〕

最近における日本文学は、時代の流れ、世界の動きを反映して目まぐるしい変化を見せながら、出版ジャーナリズムの発展と相俟って、千五百年にわたるその歴史の中でも比類のない隆盛を示しています。また、国文学研究の分野では、古典文学研究の著しい進歩とともに近代文学研究も新し

い学問として脚光を浴びつつあります。

小社では、去る昭和七年『日本文学大辞典』を刊行し、戦後、その増補改訂版、縮約版を刊行し、多くの方々のご愛用を得ましたが、縮約版の刊行以来すでに十余年を経過しました。ここに小社は、新しい時代の動きに注目して全く新しい文学辞典の出版を決意し、創立七十周年記念出版の一つとして、また一昨年刊行された『世界文学小辞典』の姉妹編として『日本文学小辞典』の編集に着手しました。幸い、編集委員の諸先生をはじめ多数の方々のご賛同とご協力を得て周到綿密な準備と努力を重ねて来ました。

本辞典の第一の特色は、今日の見地から総覧して古典から現代に至る日本文学のすべてを一冊に集約した点にあります。記紀万葉の古代から江戸時代に至る古典の大家、名作を漏れなく収録し、明治以後、現代の作家とその作品には特に多くの紙数を費やしました。作家、作品の項目の他に各時代別文学史および諸流派、様式や、これらの事項項目によっても把握できない「古典と近代文学」「ジャーナリズム」「外国の日本文学研究」「翻訳文学」「好色本」など他に類を見ない独自の項目を設け、有機的な検索に耐えうる内容を盛り込みました。特色の第二は、従来の難解な辞典的記述、資料的内容の羅列を避け、作家の鼓動と作品の息吹きを生き生きと伝えることに最大の努力が払われた点にあります。この方針にそって考えうる最適の執筆者が選ばれ、学界ばかりではなく、第一線の作家、評論家の積極的な参加を得て、その数は六百人も達しました。原稿は専門委員によるデータその他の点検を経て、編集委員による閲読校訂が行われました。第三は、一冊の資料事典にも相当する内容を盛り込んだ各種索引にあります。生・没年を付記した人名索引、発表、刊行などのデータを付記した作品索引、創・終刊などのデータを付記した新聞・雑誌索引などが収めら

れ、詳細なデータを本文から索引に移すことによって、本文は一層読みやすくなり、一方、データのみを調べる場合には容易に検索できるように配慮しました。このほか、参考文献、文学年表、文学賞受賞者一覧、年号一覧などの付録にも多くのページがさかれています。

本辞典は以上のような特色と内容を持って完成を見るに至りましたが、企画当初よりの目標である「調べるだけの辞典ではなく、親しみを持って読むに耐える辞典」として自信をもって世に出すことができませんのは、ひとえに編集委員、専門委員をはじめ関係各位の筆舌に尽くせぬご努力のためのものであります。「文学辞典はその国の文化の尺度を示す」といわれますが、本辞典は千五百年にわたる輝かしい日本文学の脈動を伝えるものとして、文学愛好者の適切な案内となり、研究家の正確な指針となるものと信じます。しかし、なお一層の完璧を期すために、不備な点については同情あるご教示、ご批判をいただき、今後に資したいと考えております。

昭和四十三年一月

新 潮 社

本辞典の編集者および執筆者

旧版編集委員

旧版専門委員

新版編集委員

新版専門協力

伊藤 整

川端 康成

瀬沼 茂樹

中村 光夫

久松 潜一

平野 謙

山本 健吉

吉田 精一

浅井 清

近代関係

伊藤 信吉

尾崎 秀樹

小田 切進

木俣 修

楠本 憲吉

紅野 敏郎

三好 行雄

本林 勝夫

古典関係

尾形 仂

神保 五弥

野村 貴次

福田 秀一

磯田 光一

上田 三四二

大岡 信

尾形 仂

尾崎 秀樹

小田 切進

楠本 憲吉

瀬沼 茂樹

中村 光夫

福田 秀一

保昌 正夫

山本 健吉

安藤 元雄

島田 修二

平井 照敏

藤木 宏幸

前川 康男



|       |       |       |       |      |       |       |       |       |      |       |       |      |       |       |       |       |      |       |       |      |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| 鮎川信夫  | 網野義紘  | 天沢退二郎 | 阿部正路  | 阿部俊子 | 安部宙之介 | 阿部喜三男 | 阿部秋生  | 足立巻一  | 安宅夏夫 | 麻生磯次  | 淺見淵   | 淺野建二 | 朝倉治彦  | 淺井清   | 秋山駿   | 秋山虔   | 秋山清  | 秋元不死男 | 秋庭太郎  | 青山光二 | 青柳瑞穂  | 青地晨   | 青木生子  | 執筆者   |
| 伊地知鉄男 | 石田吉貞  | 石田波郷  | 石沢秀二  | 石川徹  | 石川喬司  | 石川謙   | 伊沢元美  | 池田弥三郎 | 池島重信 | 池上不二子 | 池上浩山人 | 池内紀  | 井口一男  | 伊狩章   | 家永三郎  | 飯田龍太  | 飯田正一 | 安藤元雄  | 安藤鶴夫  | 安藤一郎 | 安藤宇植  | 有吉保   | 有竹修二  | 荒木良雄  |
| 猪野謙二  | 井上百合子 | 井上宗雄  | 井上豊   | 犬養孝  | 稻垣真美  | 稻垣達郎  | 糸屋寿雄  | 伊藤正義  | 伊藤博  | 伊藤整   | 伊藤信吉  | 伊東一夫 | 市古貞次  | 市川為雄  | 板垣弘子  | 板垣信   | 磯田光一 | 磯貝英夫  | 磯貝勝太郎 | 和泉あき | 伊豆野タツ | 伊豆利彦  | 泉井久之助 | 石橋万喜夫 |
| 遠藤祐   | 榎本隆司  | 江藤保定  | 江藤淳   | 江頭彦造 | 瓜生敏一  | 浦西和彦  | 梅谷文夫  | 白田甚五郎 | 白井吉見 | 宇佐美齊  | 植手通有  | 植田康夫 | 上田三四二 | 植谷元   | 巖谷大元  | 岩淵悦太郎 | 岩田正  | 岩田九郎  | 岩佐正   | 岩城之徳 | 入江隆則  | 井本農一  | 今井泰子  | 今井卓爾  |
| 岡田純也  | 岡田喜秋  | 小笠原克  | 岡倉古志郎 | 岡一男  | 大村喜吉  | 大野林火  | 大津山国夫 | 大谷篤蔵  | 太田三郎 | 大竹健介  | 大曾根章介 | 大島康正 | 大島建彦  | 大河内昭爾 | 大久保利謙 | 大久保典夫 | 大久保正 | 大久保忠国 | 大串章   | 大岡信  | 大岡昇平  | 大内初夫  | 大井広介  | 扇畑忠雄  |
| 笠井秋生  | 鍵谷幸信  | 香川進   | 遠地輝武  | 恩田逸夫 | 表章    | 小原元   | 小野寛   | 小沼丹   | 乙骨明夫 | 越智治雄  | 小田切秀雄 | 小田切進 | 小高根二郎 | 小高敏郎  | 小山内時雄 | 尾崎秀樹  | 尾崎宏次 | 桶谷秀昭  | 奥野健男  | 奥田弘  | 興津要   | 岡野他家夫 | 尾形保生  | 岡田隆彦  |

|      |       |      |      |      |      |      |       |        |       |       |       |      |       |       |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |
|------|-------|------|------|------|------|------|-------|--------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|
| 河竹繁俊 | 川添昭二  | 川副国基 | 川島順平 | 川崎展宏 | 川口久雄 | 川口朗  | 河上徹太郎 | 河合靖峯   | 神永光規  | 上笹一郎  | 蒲池歛一  | 鎌田五郎 | 釜田喜三郎 | 金子又兵衛 | 金子武雄  | 金子金治郎 | 金井清光 | 加藤楸邨 | 勝山功   | 勝本清一郎 | 勝野隆信 | 片桐顯智 | 梶原正昭  | 嘉治隆一  | 梶木剛  |
| 木村毅  | 木原孝一  | 木下彪  | 木下順二 | 木戸清平 | 木藤才藏 | 吉川英史 | 喜多義勇  | 北住敏夫   | 北川透   | 岸上慎藏  | 岸上慎二  | 菊地麻風 | 菊地弘   | 菊田均   | 菅野昭正  | 菅忠道   | 神崎清  | 河盛好藏 | 河村政敏  | 川村二郎  | 川端康成 | 川西政明 | 川名大   | 河竹登志夫 |      |
| 桑田忠親 | 黒岩一郎  | 暮山理一 | 栗原幸夫 | 栗坪良樹 | 倉野憲司 | 倉和男  | 熊坂敦子  | 久保田芳太郎 | 久保田正文 | 窪田般弥  | 窪田章一郎 | 久保田淳 | 久野取   | 国岡彬一  | 楠本憲吉  | 草部典一  | 草部和子 | 草野心平 | 金田一春彦 | 清原康正  | 清崎敏郎 | 清岡卓行 | 久曾神昇  | 木村捨録  |      |
| 権田万治 | 今山栄蔵  | 小山弘志 | 小峯和明 | 五味智英 | 小松伸六 | 駒田信二 | 小林智昭  | 小西正保   | 小西甚一  | 後藤重郎  | 五島茂   | 小島憲之 | 小島信夫  | 小久保実  | 小海永二  | 郷原宏   | 河野仁昭 | 紅野敏郎 | 香内三郎  | 香西照雄  | 小出博  | 小池正胤 | 小池藤五郎 | 郡司正勝  | 桑原博史 |
| 志賀信夫 | 塩田良平  | 沢木欣一 | 佐藤隆介 | 佐藤秀明 | 佐藤忠男 | 佐藤昭夫 | 笹淵友一  | 佐佐木幸綱  | 佐々木幹郎 | 佐々木雅彦 | 佐々木八郎 | 佐々木徹 | 佐々木基一 | 佐古純一郎 | 桜井徳太郎 | 桜井武次郎 | 坂本政親 | 坂本太郎 | 阪本越郎  | 堺誠一郎  | 佐伯彰一 | 斎藤清衛 | 斎藤明   | 近藤芳美  |      |
| 白井浩司 | 下村寅太郎 | 清水康雄 | 清水文雄 | 清水文雄 | 清水孝之 | 清水茂  | 島津忠夫  | 島田修二   | 島田謹二  | 嶋田厚   | 嶋田昭男  | 島居清  | 島崎千秋  | 柴生田稔  | 渋沢孝輔  | 渋川驍   | 柴野拓美 | 柴田武弘 | 篠田一士  | 篠田純一  | 信多純一 | 志田延義 | 重松泰雄  | 重友毅   |      |

|       |       |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |      |      |      |       |      |       |       |      |        |      |      |      |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|-------|
| 高橋和巳  | 高田瑞穂  | 高杉一郎  | 高崎正秀  | 高木市之助 | 祖父江昭二 | 曾根博義 | 添田知道  | 相馬文子  | 扇田昭彦  | 瀬沼茂樹  | 瀬戸内晴美 | 関山和夫  | 関山和夫 | 関山和夫 | 鈴木三雄 | 鈴木知太郎 | 鈴木重三 | 鈴木貞美  | 鈴木一雄  | 杉村武  | 菅井幸雄   | 末広恭雄 | 新間進一 | 神保五弥 | 新庄嘉章  |
| 田村四澄  | 玉井幸助  | 玉井五一  | 谷山永茂  | 谷沢永一  | 谷崎昭男  | 谷中良馨 | 田中裕一  | 田中裕一  | 田中保隆  | 田中西二郎 | 巽聖歌   | 多田道太郎 | 竹盛天雄 | 武部利男 | 竹西寛子 | 武田清彦  | 武田清彦 | 竹岡正夫  | 匠秀夫   | 高屋定国 | 高橋義孝   | 鷹羽狩行 | 高橋陸郎 | 高橋英夫 | 高橋春雄  |
| 外山卯三郎 | 友野代三  | 富倉徳次郎 | 富岡幸一郎 | 登張正実  | 利倉幸一  | 徳田善磨 | 土岐善磨  | 戸板康二  | 暉峻康隆  | 寺本直彦  | 寺田博   | 寺田透   | 鶴見俊輔 | 壺井繁治 | 角田一精 | 堤屋文二  | 土屋文寛 | 土橋寛   | 辻橋三郎  | 柘植光彦 | 月村敏行   | 次田香澄 | 塚本康彦 | 千葉宣一 | 多屋頼俊  |
| 中村幸彦  | 中村雄二郎 | 中村稔   | 中村光夫  | 中村忠行  | 中村俊定  | 中村純一 | 中村完   | 永平和雄  | 長野菅一  | 中野重治  | 中西進   | 永積安明  | 中谷孝雄 | 中田耕治 | 中島誠  | 中島斌雄  | 中島健蔵 | 中島河太郎 | 長沢美津  | 中川裕  | 永井義憲   | 永井龍男 | 鳥越文蔵 | 鳥越信  | 富山奏   |
| 長谷川泉  | 橋本迪夫  | 橋本不美男 | 橋本徳寿  | 橋川文三  | 萩谷朴   | 芳賀徹  | 芳賀幸四郎 | 野村貴次  | 野村喬   | 野田寿雄  | 野田宇太郎 | 野口富士男 | 西村亨  | 西田良子 | 西田勝  | 西田長寿  | 西島麦南 | 西垣勤   | 西尾実   | 西尾光一 | 仁戸田六三郎 | 南波浩  | 成瀬正勝 | 中山和子 | 中谷博   |
| 平岡篤頼  | 平井卓郎  | 平井照敏  | 冷水茂太  | 日沼倫太郎 | 肥田皓三  | 土方定一 | 久松潜一  | 樋口芳麻呂 | 樋口チヅ子 | 柘源一   | 半田美永  | 伴悦    | 春名徹  | 針生一郎 | 原田種夫 | 林大    | 浜田啓介 | 浜田義一  | 馬場あき子 | 埴谷雄高 | 服部直人   | 畑有   | 畑有   | 長谷川強 | 長谷川銀作 |

|      |      |      |      |         |      |      |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |      |      |       |      |       |      |
|------|------|------|------|---------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|------|-------|------|
| 古川清彦 | 藤原正晴 | 富士春男 | 藤平春男 | 藤田のぼる   | 藤田圭雄 | 藤沢令夫 | 藤木宏幸  | 福原麟太郎 | 福永武彦  | 福田陸太郎 | 福田宏年 | 福田秀一  | 福田恆存  | 福田久賀男 | 福田清人  | 福田タマ  | 広田栄太郎 | 平山城児  | 平林盛得 | 平畑静塔 | 平野仁啓  | 平野謙  | 平田喜信  | 平岡敏夫 |
| 松崎仁  | 松尾聡  | 松尾葦江 | 松浦貞俊 | 松井利彦    | 町田佳声 | 益田宗実 | 益田利治  | 前田妙子  | 前田愛   | 前田康男  | 本多浩  | 本多秋五  | 本位田重美 | 堀口星眠  | 堀切利高  | 堀江信男  | 保昌正夫  | 保坂都   | 外間守善 | 古谷綱正 | 古林尚   | 古館曹人 | 古田足日  | 古田紹欽 |
| 宮岸泰治 | 峯村文人 | 峯岸義秋 | 源高根  | みなもとごろう | 三橋敏雄 | 三谷栄一 | 水野春夫  | 水谷昭夫  | 水上甲子三 | 三木紀人  | 三浦雅士 | 三浦仁   | 丸山季夫  | 丸岡明   | 松本寧至  | 松村緑   | 松村博司  | 松原新一  | 松野陽一 | 松永伍夫 | 松田哲夫  | 松田武夫 | 松田修   | 松島栄一 |
| 森川澄雄 | 森川達也 | 森川昭修 | 森山幸彦 | 本山勝夫    | 本井英  | 目崎徳衛 | 室木弥太郎 | 村山古郷  | 村松剛   | 村松定孝  | 村野四郎 | 村田正志  | 村田静子  | 村島健一  | 村上智雅子 | 宗政五十緒 | 武藤禎夫  | 武蔵野次郎 | 武川忠一 | 三好行雄 | 宮田和一郎 | 宮崎柁二 | 宮城道生  | 宮城達郎 |
| 山本健吉 | 山室静裕 | 山中博光 | 山田博肇 | 山田昭全    | 山田貞光 | 山田昭夫 | 山下一海  | 山岸徳平  | 八橋一郎  | 矢野峰人  | 築瀬一雄 | 安良岡康作 | 安田保雄  | 安田武   | 安田章生  | 安川定男  | 八木福次郎 | 八木忠栄  | 両角倉一 | 森山重雄 | 森本元子  | 森本治吉 | 森本武之助 | 森友一  |
|      |      |      |      |         |      |      |       | 和田芳恵  | 渡辺守邦  | 和田謹吾  | 若杉慧  | 頼惟勤   | 米田利昭  | 吉野秀雄  | 吉田精一  | 吉田久一  | 横山白虹  | 横道万里雄 | 祐田善雄 | 山領健二 | 山本嘉将  | 山本正秀 | 山本友一  |      |

# 凡例

## 〔本辞典の構成〕

本文

人名、作者不詳の作品、時代別文学史、流派、様式、文芸用語、新聞、雑誌などの二六二七項目を収録。

付録

日本文学年表、発禁書略年表

文学賞受賞者一覧

全国主要文学館

文学行事ごよみ

旧国名一覧図、年号・西暦対照表、年号一覧

索引

人名、書名作品名、新聞・雑誌、事項

## 〔見出し〕

①本文各項目の見出し語は、太字(ゴシック)で記した。見出し語の下に現代かなづかいによる読みがなを小字で記した。

②人名については、明治以前の古典関係も含めて原則として姓名を見出し語とした。姓と名との区分は読みがなの行かえによって示し、太字見出しの字間あきはこれに関係がない。

③欧米人名はカタカナで姓のみ太字で記し、名を並み字で付記した。中国・朝鮮人名は漢字で記したが、読みがなは、本人が朝鮮語音を主張している場合はそれによった。解説文中のふりがなも同様とした。

④僧侶、戯作者、狂言作者、俳優、及び、姓不詳の人物は、それぞれ法号、筆名、雅号、芸名などで表した。その他の人物も、筆名で通用しているものは筆名を見出し語とした。見出し語以外の本名、俗称、通称、字(あざな)、筆名、雅号、芸名などは解説文に記し、索引にも収録した。

⑤作品名は長編短編の別なく『』で囲んだが、別立て作品解説の小見出しは『』を付けなかった。新聞・雑誌は「」で囲んだ。(索引の項目名では、かぎを付けなかった)。

⑥同名の雑誌は、見出し語と読みがなに続く分類表示で区別するが、同じ分類に属し、かつ本辞典に立項されているものは創刊順の番号を付して混同を防いだ(例、「文学界①」)。立項されない同名雑誌については項目の末尾に解説した。

⑦項目中に、つぎの二種類の小見出しを用いた。

(1)長い事項項目の各章題を「」で囲んだ。雑誌項目を「第一次」「第二次」などに区切って解説した場合もある。

(2)人名項目の末尾に別立てで主要作品を解説した場合は作品名を【】で囲んだ。

## 〔配列〕

①見出し語(太字)の下に記した読みがな(小字)により、五十音順に配列した。

②長音符号、中黒(・)、句読点、かぎ(「」『』)は無視し、清濁については清音・濁音・半濁音の順とする。

③雑誌名で同音のものは、創刊番号順に配列した。

## 〔解説文〕

(表記法)

①かなづかいは、解説文には現代かなづかいを用的、引用文、

殊に詩歌俳句、また、書名作品名、雑誌名などは原典のままとした。ルビその他、読みがなは、すべて現代かなづかいを用いた。

②送りがなは、解説文では原則として内閣告示「送りがなのつけ方」に従ったが、選択の許されるものは多くこれを省き、また、適用に無理のある特殊な用語などは原則に従わなかった。引用文、殊に詩歌俳句、また書名作品名などは原典のままとし、必要な送りがなはルビの中に活かした。

③外国人名などのカタカナによる表記は、『新潮世界文学小辞典』の扱いに準じた。

④漢字の字体は、常用漢字には常用字体(新字体)を用い、人名などの固有名詞についてもこれを原則とした。常用漢字以外には正字体を用い、まれに俗字を採用した。

⑤音訓表以外の漢字には原則としてルビを付けたが、頻出して容易に読める字にはルビを省略し、また、音訓表や人名用漢字音訓表にあるものでも、誤読のおそれのある字にはルビを付けた。

⑥変体がなは、平がな、または常用漢字によって表した。

(解説文中の特殊な記号)

①解説文にある人名、書名作品名、新聞・雑誌名、流派名、様式名、文芸用語などのうち、本辞典に立項されているものについては、その語の肩に米印を付した。

②引用の詩の中に用いた(斜線)は原文における改行を表し、// (二重斜線) は行あきを表す。

(固有名詞の記載法)

①作品名は、角書き(つのがき)は小字で一行書きとした。索引ではその部分を省いた。

②地名、団体名などは当時の称を用い、ときに後年の称を注記

した。但し、学校名には一般に通用している略称を適宜使用し、旧帝国大学(帝大)は現在の呼称で記した。

③明治四年の廢藩置県以前の国名・藩名は、すべてそのまま用い、巻末付録の「旧国名一覽図」において現行の都道府県名との対照を示した。

④廢藩置県以後については、その当時使用された地名(都道府県名、郡市町村名)を用いた。人名小項目における生地記載は、原則として、都道府県名または市名のみとした。

(年代表記、時代区分)

①年代記述には原則として日本年号を使用し、巻末付録の「年号・西曆対照表」「年号一覽」において西曆との対照を示した。南北朝時代の年号は適宜一方を記し、あるいは併記し、両朝年号の対照は「年号一覽」に示した。

②近代以前については、大和、奈良、平安、鎌倉、南北朝、室町、安土桃山、江戸の時代区分を行い、人名項目の記述の初めにこれを記して、理解を助けるように努めた。

③明治六年一月一日の太陽曆施行以後の年月日は現行の太陽曆で記し、それ以前、明治五年十二月二日(陽曆二月三日)までは太陰曆で記した。

(生没年表記)

①人名項目の初めには、原則として日本年号による生没年月日を記し、西曆年をつぎに併記した。外国人や帰化日本人については西曆を先とした。

②年月日の不確定な部分には疑問符を付し、不明の部分は疑問符のみで表し、全く不明の場合は「生没年未詳」と記した。特に問題のあるものは本文中で説明するようにした。

(作品の年代表記)

①作品の年代は、原則として初出(新聞・雑誌発表、書き下ろ

し刊行、初演)、古典については成立の年代を採り、おおむね作品名のつぎに( ) 付き小字で記した。但し、書き下ろし以外でも刊行年を採った場合が少なくない。

②新聞・雑誌発表年、及び、古典関係の成立年は単に年代だけで表し、刊行・初演年は年代に「刊」「初演」を付した。

③解説文を読みやすくするため、( ) 内のデータは簡略にし、初出・刊行などの詳細なデータは、別立て作品解説や書名作品名索引に収録した。

(新聞・雑誌の発行年月日)

①紙誌名の項目、及び、人名項目末尾の別立て作品解説においては、新聞の発行年月日、雑誌の発行年月を詳記したが、その他においては、作品の年代と同様に簡略にし、新聞・雑誌索引や書名作品名索引に詳細をゆずった。

②雑誌については、月号表示のある場合はその年月を採り、月号表示のない場合にのみ発行年月表示によった。いずれの表示もない場合、関係者の証言によったものもある。

### 〔解説末尾の特記〕

(全集その他)

①人名項目には、全集・著作集・全詩集・全歌集・全句集・全エッセー集など、またはそれに類する選集を末尾に記した。

②全集類は、刊行年(初版の開始年と、完結または中絶の年)、及び、発行所を記し、原則として索引には採らなかつた。

(古典のテキスト)

①古典関係では、人名項目の末尾、別立て作品解説の各末尾、あるいは作者不詳作品の項目末尾にテキストを記載した。

②古典のテキストは、見出し「テキスト」の下に、(A)(B)(C)に分けて記載した。(A)は専門家向きの本本文または

本文研究書、(B)は注や現代語訳などを含み、研究者および一般愛好家向き、(C)は現代語訳や注、対訳などがあり、入手しやすいものである。各書名の上に記した人名は、編著者、校注者などを示す。刊年は初版発行年。

(復刻版)

①雑誌や全集に復刻版のある場合は、これを記した。復刻版の範囲は写真複製にかぎらず、新たに活字を組んだ版本でも、信頼できるものは復刻版に含めた。

②雑誌の項目末尾、見出し「復刻版」の下に記したものは、全号またはどの部分が復刻されたかを日本近代文学館の調査により明示した。刊年、発行所名は初版のそれである。

## あ

相生垣瓜人 あひんがき 明治三二・八・一四

一昭和六〇・二・七（一八九八一・一九八五）

俳人。本名賢二。兵庫県高砂町生れ。東京美術学校卒。停年まで浜松工高勤務。昭和五年「ホトトギス」投句、八年「馬酔木」に参加。二五年、百合山羽公と「馬酔木」の僚誌「海坂」を創刊。庭前の草木鳥虫を相手に、季節の推移の中に、漢学素養のにじみ出た独得の俳諧を創始した。脱俗の風格、エスプリのきいた句風で興味津々たるものがある。句集『微茫集』（昭三〇刊）で馬酔木賞、『明治草』（昭五〇刊）で蛇笏賞受賞。没後に遺句集『負喧』（昭六一刊）がある。「初湯にて初湯ほこりをしたりけり」「天高し鴨も頻に是を云ふ」。〔堀口星眠〕

会田綱雄 つねお 大正三・三・一七ー平成

二・二・二二（一九一四ー一九〇）詩人。東京生れ。日大社会学科に学び、昭和一五年、中国に渡って南京特務機関などに勤務。南京で草野心平を知る。敗戦の翌年帰国し、「歷程」同人となる。詩集に高村光太郎賞

の『鹹湖』（昭三三刊）、『狂言』（昭三九刊）、『汝』（昭四五刊）、読売文学賞の『遺言』（昭五二刊）などがある。現代的な認識に伝説や寓話や民俗的な意匠をまとうせたり、社会を自然になかば溶解させたりしながら、ときに諧謔や残酷の風味を漂わせ、神秘的な生命の条件を探っている。新潮社や筑摩書房嘱託の編集者を勤めた。（清岡卓行）

会津八一 あいつち 明治一四・八・一ー昭和三

一・一・二二（一八八一ー一九五六）美術史家、歌人、書家。別号秋岫道人、渾齋。新潟市古町通に生れた。新潟中在学中より八朗郎の俳号で「ホトトギス」に投句し、『万葉集』を愛読して短歌をも作った。また明治三三年根岸庵を訪い、正岡子規に僧良寛の存在を紹介するところがあつた。三九年早大英文科を卒業、新潟県中頸城郡板倉村の有恒学舎に英語教師として赴任した。四一年はじめて大和地方に古美術をさぐり、いわゆる奈良歌詠を試みたが、翌々年早稲田中学に転任。その秋早大の文学会講演で当時未開拓であつた小林一茶の存在を深刻な人生詩人として創唱した。このころから坪内逍遙の知遇を得、早大に出講して英文学を講じた。四四年柳田国男らの郷土研究会に加わり、後またギリシア文化の究明に心を傾けたが、大正一一年に至り奈良美術研究会を創立、一三年には処女歌集

『南京新唱』を刊行した。

昭和元年以降早大に日本・東洋美術史を講じ、四年浜田青陵、天沼俊一らとともに奈良飛鳥園から雑誌「東洋美術」を刊行、六年文学部教授となり、九年には『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』（昭八刊）により文学博士の学位を受けた。早大恩賜館内に東洋美術史料陳列室を設けたのもこの年である。このころから作歌活動も積極的になり、一五年には歌集『鹿鳴集』（前著『南京新唱』をもふくむ）を刊行、歌名とみに高まるに至つた。ついで一七年歌話を主とする『渾齋隨筆』を、一九年には歌集『山光集』を刊行。平生みずから歌壇外におき、歌人との交わりを求めなかつたが、二〇年三月はじめて斎藤茂吉と面会、その数日後戦火のため東京の下落合の家を失い、郷里新潟市に帰住した。終戦前後心身ともに労苦の生活を送つたが、二一年「夕刊ニイガタ」の社長となり、翌年には歌集『寒燈集』を、二六年には『会津八一全歌集』を出した。後者は読売文学賞を受賞。その後自作短歌に詳注を施した『自註鹿鳴集』（昭二八刊）を出し、早大名誉教授、新潟市名誉市民、新潟日報社社長として世を終えた。書の道にもすぐれ、個展の開催十数回に及び、没後もなおつづいてい。書跡集に『渾齋近墨』（昭一六刊）、『遊



神帖」(昭三三刊)、『会津八一の書」(昭三二刊)、『秋艸道人の書」(昭四〇刊)などがあり、また大和、新潟に歌碑も多い。八一は学者として美術史学、金石学に新風を建てたが、短歌についても万葉調、良寛調を借りてしかもけつして擬古に陥らず、新鮮ないちじろしい個性を発揮した。「かすが野に押しするつきの霞がらかにあきのゆふべとなりけるかも」『ほゝゑみてうつゝ、ごゝろにありたゝす百済ぼとけにしくものぞなき』、『会津八一全集』全一〇巻。昭三三—三四、中央公論社刊。

(吉野秀雄)

アイヌ文学 アイヌ文芸 アイヌ民族は古来より固有の文字をもたず、文字による文芸は発展しなかつたが、口承文芸は周辺諸民族と比べても非常に豊かなものをもっている。この中にはなぞなぞ・呪文の類や、即興による抒情歌などいろいろなものが含まれるが、アイヌ文学というものをとくに物語性をもつものに限定した上で、知里真志保はそれを詞曲と散文の物語とに分けた。その分類の基盤となつてゐる北海道沙流・胆振地方の呼称に従えば、前者は広義のユーカラであり、後者はウエケレと呼ばれるものである。

詞曲はさらに神謡と英雄詞曲とに分けられる。前者は、動物や植物、あるいは雷や火などの自然神がみずからの体験を語る話

で、それらの神々がどのような性格・存在であるのが、具体的なエピソードを通じて示される。各々の物語ごとに独自のメロデーと、「ハンチキキ」といつたようなリフレインの句をもつ。物語の一節ごとにそのリフレインを繰返しながら「ハンチキキ、神様たちを、ハンチキキ、私は招いて……」のように謡っていくのが通常のスタイルである。

英雄詞曲は、一般にユーカラの名で知られてゐるものである。主人公はポイヤウンべなどのあだ名で呼ばれる少年であり、人間とはいいなながら空を飛ぶなどの超自然的な力をもつ。ユーカラは、このポイヤウンべがさまざまな戦いの中で美少女を妻として得たり、肉親に再会したりする冒険談であり、神謡に比べてより娯楽性が高い。長いものは語り終えるのに一昼夜以上かかるといわれる。リフレインの句はなく、語り手はレブニと呼ばれる棒で囲炉裏の炉縁を叩いて拍子を取り、浪花節語りのような独特の発声法と節回りで謡っていく。これらの詞曲は、常套句の連続によつて語り進められ、日常会話の用語とはかなり異なつた語彙や表現が用いられる。

散文の物語は、特別な節やリフレインをつけずに、より日常会話に近い表現で語られるものである。これもいくつかに下位区

分されるが、中心となるのは、どこかの村の村長やその妻などが自分の体験談を語るというスタイルを取るものである。ユーカラなどと比べると、より日常生活に近い世界が描かれ、登場人物の心理描写などもより写実的である。また、知里真志保の『アイヌ民謡集』によつて知られるようになったバナベ・バナベ譚は、いわゆる「上の爺下爺」譚であり、散文の物語の中では一段低いものに見られてゐる。

金田一京助や知里は、このほかに、文化英雄オキクルミを主人公とする聖伝というジャンルを、神謡の一下位区分として立てているが、こうしたものが独立のジャンルとして確認されている地域は沙流・胆振の一部に限定されており、後代の発展形式と見られる。

このようなアイヌの物語文学は、ほとんどの場合、「私は……私は……」という形で主人公の体験談として語り進められる。そのため「一人称説述体」であると言われ、それがアイヌ文学の大きな特色であるとされてきた。しかしアイヌ語においては、話者が自分自身を指す「私」と、物語中での「私」との間に、言葉として明確な区別があるのであり、あくまで自分ではなく他人の体験談を語つてゐるのだということが、形式の上ではつきりと示されてい